

れば子供でもわかるようなことでも自分達が正しいと信じれば、あのような事件も平気でやる。

【執筆者の紹介】

大正十三年十一月

岩手県一戸町出生

昭和十五年

東京市大森工業学校中退

昭和十六年

青森県大湊海軍軍需部に
軍属として勤務

昭和十九年八月

千葉県第四航空教育隊に
入隊

昭和二十年一月

満州第四錬成飛行隊に転
属

八月

終戦、シベリア抑留

昭和二十四年八月三十日

復員 復員後開拓地に入
植農業

(岩手県 田辺 壮久)

私の太平洋戦争

福島県 小平 里美

小学校に入學して間もない昭和五年四月上旬、第二師団が中国の奉天（瀋陽）に移駐のために若松の歩兵第二十九連隊も軍旗と共に出発しました。その訳もわからぬ私達は先生に引率されて日の丸の小旗を振って見送りました。

翌昭和六（一九三一）年九月、満州事変が勃発して、多門師団の平田連隊として勇名をはせた第二十九連隊の戦死した兵士の英霊を迎えに度々先生に引率されて道路の両側に並び、ラッパの奏でるもの悲しい音色、白布に包まれ戦友の胸に抱かれた遺骨の行列は今でもまぶたに浮かびます。その頃から戦争が身近に感じられ始めたような気がします。

満州事変の翌年三月には満州国建国が宣言され、翌八年一月に満州に派遣されていた第二十九連隊が若松

に帰還。その後、生徒の軍事教練はますます強化され、昭和十年、小学六年生になった私達も、四月二十五日の軍旗祭には木銃をかついで連隊長の閲兵を受け分列式に参加する軍国主義教育に変わっていったのです。

小学校を卒業した翌昭和十二年七月七日に始まった支那事変も中国本土で戦場がますます拡大し、軍都若松では新たに歩兵第六十五連隊（両角部隊）が再編成されて中国に出発。

昭和十四年には歩兵第二一四連隊（弓部隊）が編成され同じく大陸に出発していきました。

この年の五月に満州では日ソ両軍が衝突してノモンハン事件が発生、九月にヨーロッパでもドイツのポーランド侵攻により第二次世界大戦が始まるなど、戦争色はますます深まって、その大きな渦に巻き込まれてゆきました。

昭和十三年四月に国家総動員法が公布され、軍需産業に動員される人もだんだん多くなりました。

私も昭和十六年七月に徴用令（白紙召集）により横

須賀海軍工廠総務部庶務係文書班に勤務することになり、十二月八日の太平洋戦争を迎えました。

翌十七年四月十八日朝六時、太平洋上で監視の任務に就いていた徴用船第二十三日東丸より横須賀鎮守府に「犬吠崎東三百海里沖に敵空母三隻発見」の無電があり音信は絶えた。

監視の任務を果たして犠牲となった第二十三日東丸の情報は活かされなかった。「まさか本土までは」という油断だったのだろうか、正午過ぎに京浜地方に空襲警報が発令されたが、間もなく横須賀鎮守府裏海軍砲術学校方面より低飛行で工廠上空に侵入した米軍機ノースアメリカンB25一機より爆弾三個、焼夷弾四十八個が投下された。低空からだだったので焼夷弾は不発が多く大きな被害はなかったが、爆弾の一個は四号ドックに入って航空母艦に改装中の潜水母艦「大鯨」の横腹に命中し、乗組員の水兵や工員に数人の死者が出て「大鯨」は横腹にポツカリと大きな穴があいた。

緒戦の戦果に酔って僅か四カ月、米軍の第一回の本土空襲の洗礼を受けました。

太平洋戦争もますます激しくなった昭和十八年、徴兵検査で第一乙種となり、現役兵として一月に入隊の決まった十二月下旬、徴用解除となり軍港の横須賀を去って帰郷しました。

昭和十九年一月十五日、大阪集合を命ぜられ故郷を後にして宿泊の旅館で新しい軍衣袴を渡され、襟に一ツ星の階級章を縫いつけ、輸送指揮官に引率されて大阪駅より列車に乗り込みましたが、どこに行くかも全然わからず広島を過ぎ関門トンネルより九州に入り、博多で下車して連絡船に乗り込みました。

まず軍歴表による概要を記します。

旧本籍地若松市 旧軍階級主計伍長

大正12年6月1日生

年	月	日	階級	記事
昭和19	1	15	二等兵	現役兵として独立守備歩兵第24大隊に入営
1	18			博多港出発

1	1	1	1	釜山港上陸
18	1	1	1	鮮満国境通過
21	1	1	1	三江省佳木斯着
23	6	6	6	佳木斯出発
15	6	6	6	湯源県南又着
15	7	7	7	一等兵
10	7	7	7	独立歩兵第二六六大隊に転属
19	8	8	8	南又出発
20	8	8	8	富錦県五頂山着
20	1	1	1	上等兵
10	1	1	1	五頂山出発
25	1	1	1	新京(長春)着
27	1	1	1	関東軍経理部幹部教育隊に派遣
25	6	6	6	教育終了、原隊復帰
25	6	6	6	新京出発
26	6	6	6	五頂山着
10	7	7	7	兵長
30	7	7	7	歩兵第三六七連隊に改編

主計伍長

8 10 五頂山出發

8 15 依蘭着

8 20 依蘭出發

9 10 方正着

9 11 武装解除

9 15 入ソ

10 15 ハバロフスク第16地区第18

10 30 分所に収容

24 ナホトカ港出發

10 3 舞鶴港上陸(第一大拓丸)

復員

昭和十九年一月十八日朝、博多港を出發した連絡船は波の荒い玄界灘を乗り越え夕方釜山に上陸しました。

大きな劇場のような所で休憩して夜中に再び列車に乗り日本海岸を走り続け、清津、羅津を過ぎ、豆満江を渡り牡丹江を過ぎてまだ北に進みます。一月二十三

日の払暁、下車の命令で降りた所が三江省の佳木斯でした。初めて踏みしめた満州、郷土の先輩達が血と汗を流した因縁浅からぬ満州が初年兵の出発点となりました。初めて体験する零下の凍土を踏みしめて、佳木斯郊外の佳南練兵場近くに関特演の頃建てられた半地下の兵舎に入りました。そこで二週間くらい前に入隊した同年兵の現地徴集と朝鮮特別志願兵が迎えてくれました。

三浦部隊佐久間隊第三班(小銃班)に編入されて初年兵教育が始まりました。

後でわかったことですが、私達は関東軍第三独立守備隊要員で、入隊する三カ月ほど前に三独は南方派遣となり初年兵教育を第七独立守備隊に委託して移動したために、七独は三独初年兵教育隊を編成し、七独三個大隊より教育要員を派遣して私達の教育に当たった。

一個大隊分の初年兵が二個中隊に分けられ、三個大隊分で六個中隊、他に機関銃中隊と歩兵砲中隊が三個大隊分の混成で八個中隊の初年兵だけの教育隊でし

た。中隊長はほとんどが三年兵の幹部候補生で少尉に任官したばかり。班長、班付助教は四年兵の下士候の軍曹か下士勤務兵長、助手は二、三年兵の上等兵で、中隊は四班に分かれ一班が擲弾筒、二、三班が小銃班、四班が軽機班という編成で、各班に助教の班長と班長補佐、助手の三人で六月中旬の一期教育終了まで独歩の教育で徹底的に鍛えられました。

一期教育が終わると南方派遣の三独に転出の予定でしたが、三独を基幹として昭和十八年十一月編成された海上機動部隊第一旅団は釜山に集結し、十二月に但馬丸で釜山を出港、下関・佐伯を経由して、当時南洋委任統治のマーシャル群島トラック島、さらにブラウン島、クエゼリン島さらにウオッセ島を目指したが、この後は戦況が変化して駆逐艦でピストン輸送することとなり、一個中隊と本部の一部が先発隊となり、明け方ウオッセ島に向け出発、夕方対空射撃をしながらウオッセ島に上陸しましたが、その後は待てども待てども本隊が到着しません。米軍の猛爆撃でクエゼリン島で全員玉碎して島は占領されてしまったのです。

南方の島で孤立した部隊に輸送できなくなった三浦部隊の初年兵は七独の三個大隊に配属されて関東軍に残ることとなり、六月十五日、七独第一大隊（八四六部隊）第三中隊に配属され三江省の南叉に移りました。

第一大隊本部と一、二中隊は佳木斯、四中隊は千振にあり、第二大隊（七七五部隊）は富錦地区、第三大隊（三三八部隊）は鳳翔と、主に三江省の主要な街に駐屯して黒竜江、松花江沿岸に国境監視隊を派遣し、東北満ソ国境を準備していた七独は七月十日に独立守備歩兵大隊より独立歩兵大隊に編成替えとなり、旧七独の三個大隊及び独守歩第一、第三大隊、七独砲兵隊工兵第十連隊の一個中隊は富錦駐屯隊となり、富錦及び近郊の五頂山（ウルクリ山）に移駐して要塞陣地構築に汗を流しました。

十一月下旬に五頂山を下りて兵舎に戻り八四六部隊本部経理室勤務となり、年を越した昭和二十年一月下旬に新京の関東軍経理部幹部教育隊（八一五部隊）に派遣され、主計の教育を六月二十五日で終了、原隊復

婦となり富錦の八四六部隊に戻ったところ、富錦駐屯の七七五部隊を残し八四六、三三八部隊は第二線陣地の構築のために留守隊を若干残して佳木斯とハルビンの中間地点、方正近郊に移駐した後でした。再び松花江を遡航し方正近郊の大隊本部に復帰しました。

七月中旬に富錦七七五部隊経理室に転属の命令があり、着任したのは七月下旬でした。

七月三十日には第一三四師団歩兵第三六七連隊に編成替えとなつて八月に入り、経理室の業務にもまだ慣れない九日未明、非常呼集のラッパで起こされて、ソ連軍の侵攻で国境第一線部隊は戦闘中との事で、部隊も終日戦闘準備で暮れました。

富錦街に侵入したソ連軍は部隊の陣地を包囲し我方より二桁も三桁も違う膨大な兵力で攻撃を開始しました。これを迎え撃ち十一日より三日間にわたる激戦で約三百人の部隊の半数を失い、十四日の午前零時を期して包囲された要塞陣地を脱出、近郊の五頂山要塞陣地に撤退して十五日夜半まで山頂の陣地で生存者の集結を待ちました。

後方の本隊との通信も絶え、その日正午に終戦の大詔が下されたことなど知るすべもありませんでした。

再びソ連軍に包囲された五頂山を十六日未明再び脱出、連隊本部のある方正に向かって撤退を開始しました。

当時の第七七五部隊木村義巳部隊長の回想録をお借りして亡き戦友に捧げます。

そもそも日ソ中立条約を一方的に破棄し、突如として国境を突破し、怒濤の如く侵攻して来た極東第二戦線軍の主力である第十五軍の進撃は、空、陸、江、一体となり我に十数倍する物量に物を言わせ、一挙に富錦陣地を壊滅せんと熾烈な攻撃を加えて来たのであるが、陣地を死守して頑強な抵抗をつづけ、その強引な前進を阻止して一步も譲らず、あくまで我が主力たる第一三四師団の戦闘準備の時間的余裕を稼ぐために、勇猛果敢な死闘を繰返し、対戦車肉攻に、猛烈なる砲爆撃により多数の戦友の尊い生命を失ったが、その使命達成に死力を尽くしたのである。

この事實は、ソ連軍のマリノフスキー元帥が「関東軍潰滅す」の著書に、壮烈を極めた「富錦攻防戦」と題し、ソ連邦英雄称号を受けた二人の勇士を作り出した大激戦の様相を述べているが、それ以上に勇戦奮闘した多くの戦友の遺勲を忘れてはならぬ。一旦師団の

転進命令を受けるや、夜陰に乗じて敵の包囲を突破するために敵前斬込みを敢行し、九死に一生を得て五頂山陣地に集結して、再び敵を牽引した。更に終戦の事實も知らされずその翌日より転進を始め、ひたすら師団主力に合流すべく、道なき湿地を渡り、食なき密林の山岳地帯を彷徨し、満人の襲撃を逃れる一般日本人や残存兵を收容しつつ、日夜を問わず強行踏破することと五百キロメートル、一カ月に及ぶ難行苦行の体験を重ね、師団司令部の位置方正を目前にして武装解除を受けたのである。

この貴重な戦争の体験を後世に語り継ぐことこそ、生死を共にした多くの戦友の英霊を慰め、その遺志を継ぐ道であると思う。

方正近郊の部落まで撤退した九月十日、ソ連軍の軍使が来てようやく終戦の事實を認め、翌九月十一日、涙をのんで武装解除しました。

ソ連軍の管理下に入った部隊は方正の旧興農合作社跡に收容されました。

方正地区に集められた約七千人の邦人は、九月下旬に兵役関係者と民間人に分けられ、民間人はハルビンに、兵役関係者は千人単位の作業隊に編制されて、徒歩で佳木斯まで護送されて旧工兵隊兵舎の仮收容所に入りました。

十月十一日に三個梯団三千人が編成され、旧ソ連軍の指揮下に千名が曳船に乗り込み、他の二千人はそれぞれ二隻の貨物用ライターに分乗して、間もなく訪れる厳寒の凍結を前に松花江を下って、やがて思い出の富錦埠頭に停泊し石炭や食糧野菜を積み込み始めました。

僅か二カ月前、要塞陣地攻防のソ連軍との激戦の一コマ一コマが浮かんで来て、この地に眠る多くの戦友の英霊よ安らかにと祈り万感胸にあふれて感無量、あ

あ思い出多き富錦の街よさようなら。

松花江も渇水期で水深が浅く、船は時々座礁し他の航行船に引かれて脱出しながらようやく黒竜江に入り、ハバロフスクに着いたのは十月二十三日でした。

直ちに上陸、市内の第十六地区第十八分所に収容され、ここから長いシベリアの抑留生活が始まりました。

抑留経験者はあまり語りたがらないが、それはつらい経験を思い出したくないからでしょう。

数多い体験は語り尽くせないが、思い出すままに幾つか綴ってみます。

物交

零下二十―三十度となる冬将軍も刻々と近づきつつあったが、私達交戦部隊は服装を見れば歴然、一週間の戦闘と一カ月にわたる転進で夏衣袴はポロポロ、軍靴も穴だらけ、持ち物は雑のうと飯盒、水筒だけ、一方、後方部隊は交戦しないうちに終戦となり、新しい冬服に着替え、毛布や靴下、シャツ類も持てるだけ

持って武装解除を受けたので、豊富な物資を持って入りました。

しかしこの豊富な物資も一冬越すとほとんどなくなっていった。僅かな食糧で毎日労働に駆り出され、空腹に耐えて頑張るより方法がなかったが、物資を持てる者は毛布や靴下を一枚二枚と作業場に持ち出して、ロシア人と物交して黒パンに換え胃の腑に送り込んでしまった。私達は寒さに震えながら空腹を抱いてうらやむ日が続いた。

強制労働

雑穀のスープやお粥のような朝食が終わると、病人を残し毎日作業隊を編制して現場に向かう。腰に三百五十グラムの黒パン（昼食用）と飯盒をさげて、自動短小銃（通称マンドリン）を背にしたソ連軍の監視兵に付き添われ重い足を運ぶ。

市街地の労働は主に建築現場で、石、レンガ、ブロック、コンクリ、材木運びや駅で貨車からの石炭下ろしなどであった。慣れない重労働と慢性的な飢餓状

態で、無気力な集団は「ダワイ」「ダワイ」と牛馬のごとくに過酷な労働に追いたてられた。

食料

入ソして二年くらい穀物は粟・キビ・高粱・大豆・エンバクなどで米は全然なかった。その後、北鮮との交易でいくらかずつ各收容所に米が渡されるようになった。野菜と言えばジャガイモとキャベツが代表的なもので、日本のように豊富な種類は見ることができなかった。俘虜給与規定で一日穀物何グラム、黒パン、野菜、塩、砂糖、タバコ、各何グラムと決められて、收容されている人数分だけ炊事係が毎日受領して調理したものを各分隊ごとに分配して食べていたが、入ソ当時はソ連側の係の者や、同じ俘虜の旧将校、下士官などの中間搾取が多く、我々の口に入る頃には量も大分少なくなっていた。

常時空腹で、道に転がっている凍った馬糞を見ても黒パンではないかと近づいて目をこらす。ロシア人の住居の近くに捨てられた小さなジャガイモがガチガチ

に凍って山になっているのを見つけると早速ツルハシやスコップで山を崩し飯盒に入れて作業場のストーブで煮て食べる。小さなイモの粒は皮が青くえぐい苦い味がしたが、空腹を満たすためには贅沢は言えない。春になって雑草が芽を出すと食べられるものは何でも摘んで食べた。

小川の泥の中で大きな淡水貝をたくさんみつけて大喜び、塩ゆでして、たらふく食べた後で下痢や腹痛を起こして苦しんだ事も忘れられない思い出である。

虱と南京虫

日曜日は労働も休みだったが收容所内の清掃や小作業があった。

入ソ当時は虱が蔓延して栄養失調の体から貴重な血液を奪っていた。板敷の二段ベッドで裸になった男たちがシャツやズボン下を裏返して縫い目に鈴なりに連なっている虱を左右の親指でプチプチと潰しながら日曜日を過ごしたが、翌日からまた体じゅうをモソモソとはい回っていた。

夜眠りにつくると新たな敵南京虫の襲撃である。二段ベッドの板敷や柱の割れ目に落ちていた大群が攻撃を開始して安眠できない。吸血されたあとはポリポリと傷になる程かいても痛がゆく、全く泣き面にハチであつた。

安楽死

最初の冬には、厳寒の過酷な労働と粗悪な食べ物で栄養失調となり、弱い者は次々と倒れていった。

材木を組んで板を二段に敷き詰めたベッドで雑穀を炊いたお粥の夕食が終わり、寝転がって戦友との話は食べ物の話ばかり、おいしい米の飯、ぼたもちが目の前にチラついてゴクンとツバをのむ。

収容所の中央に大きなベチカがあつた。ホンノリと暖かなその壁に背を付け、ポロ服を着て頬がこけ目ばかりギョロつかせた栄養失調の兵士がはなをたらして震えていた。

翌朝ベッドで冷たくなっていた彼の屍が収容所の外に運び出された。彼にとっては安楽死であつたかもしれ

れない。

私達にいつその順番が回ってきてても不思議ではない環境であつた。

便所

数百人も生活している収容所の便所は一カ所しかなかった。十メートル×四メートル、深さ三メートルくらい大きな穴を掘り、厚板を渡して丸い穴を十数個あけてそこで用を足した。

冬は穴の上にかがみこむと尻の辺をチクリというようなこともしばしばだった。落下物が寒さのためにすぐ凍ってしまうので穴の下だけだんだん高くなり槍ヶ岳のようになっていた。

時々鉄棒で槍ヶ岳を壊してならしてやる。穴の中がいつぱいになるとガチガチに凍った糞便をツルハシと鉄棒で碎き袋に詰め馬ソリに積んで黒竜江の真ん中あたりまで運び捨ててきた。春になって氷が解けると、黒竜江の魚の餌にもなったのだからか。黒竜江は一メートルも凍っていて馬ソリや自動車はおろか、

戦車やレールを敷けば汽車でも渡れるほどガッチリと凍っていた。

栄養失調になると特に便所通いが頻繁になり、収容所入口の二重の扉を開けて外套をかぶって零下二十〜三十度の室外に出て小走りに便所に行き、戸もない便所で体が冷えきり、冷えて用を足してベッドに入ると体が温まらないうちまたすぐ出たくなり便所に急ぐ。その繰返して一晩に数十回も通い、労働で疲れて南京虫に攻められ眠ることもできないと泣いていた者もたくさんいた。

民主運動と演芸会

収容所の生活にも慣れ、ようやく落ちつきを取り戻した入ソ二年目の頃から、故国に帰ることが出来るのか、はたまたシベリアの土になるまで一生囚人の強制労働を続けなければならないのか、夢も希望もない毎日を無気力で過ごしていたが、誰からともなく土曜日の夜は演芸会をやるとうという声が出て、早速歌や踊り、お国自慢の民謡と、しばし賑やかな拍手のうちに

過ごし、寂しい抑留生活の慰めのひとときであった。

同年兵に入隊前浪花節の座長でどき回りをしていた南條文若君がいた。現在の三波春夫氏で、本名を北詰文司と言った。「北詰、一曲やれ……」声がかかると三味線の伴奏もなしに『伊那の勘太郎』や『佐渡情話』など一節唸ったものだった。

やがて脚本を書いて芝居までやるようになった。軍隊というところは、あらゆる職業人の集まりだからその気になれば何でも作ってしまう。ひそかに馬のしっぽを切ってきてカツラを作ったり、ロシアマダムの服をせしめてきて着物を縫ったり、小道具などいくつかの間にか揃えてしまうから不思議だ。

そのような望郷の毎日の中から、ハバロフスクで歌われたのが『異国の丘』であり『ハバロフスク小唄』だった。

時を同じくして日本新聞（社会主義宣伝用）を中心にして民主運動なるものが始まった。民主主義・社会主義・共産主義・帝国主義など言われても何の事かサッパリ分からなかったが、オルグとか言う民主運動

の積極的分子の活動で各収容所に民主運動が広がっていった。

最初は反軍闘争から始まった。敗戦により戦争は終結し軍隊も解放されたというのに、旧軍の階級組織が厳然と続いていることに初年兵や下級兵士の中で将校や下士官が中隊長や班長を続けていることを不満として、上司に対する批判やつるし上げなどが続発して、組織の長や作業班長など民主的な選挙で決めようということになり、若い初年兵が中隊長や班長になったりして大きな変革があり、将校や反ソ的な幹部等はこの収容所に追放された。

親ソ的なオルグが権力を持ち、ソ連政治部の支援で民主運動は活気を帯び、赤旗の歌やインターナショナルが響くようになった。

社会主義や共産主義に心酔したわけではないが、時の流れには逆らえずに民主運動の大きな渦に漂流していた。

数十万の抑留者が一番に望んだダモイという言葉、武装解除当時よりこの言葉には随分とだまされ続けたと思う。「ハバロフスク、ウラジオ、そしてすぐ日本にダモイだ」と言うソ連兵の言葉で皆が続々と入ソして強制労働に従事させられた。

抑留生活はつらい事苦しい事の連続ではあったがダモイという餌につられていつしか三年も過ぎた二十三年の六月下旬ダモイが決まって、貨物列車に一週間はど揺られてナホトカに着き、すぐにも船に乗れるかと喜んだのも束の間で、帰国船の遅延により帰国梯団の編成から外されて労働大隊に逆戻りしてしまった。

その収容所がナホトカの港を見下ろせる丘にあり、作業をしながら後から後からナホトカに着いては先に船に乗って帰国して行く戦友の姿を遠く見送るたびに不運を嘆いた。帰国が遅れるならば港も見えない奥地にいた方が何程か楽だったろう。餌のお預けをされた犬の心境か、ナホトカでまた一冬越した。

二十四年も春になれば一番先に帰国できるかもしれないという夢もまた裏目に出て、五月中旬ナホトカから貨車で奥地に逆行、ソ満国境興凱湖畔の赤軍コロホーズ（自活農場）に着いた。見渡す限りのジャガイモ畑で、会津盆地ぐらゐもあろうか、延々と数百の畝が続いていた。

大型トラクターで耕した畑へ種芋を運んで積み込んだり雑役に汗を流した。芋が芽を出すや雑草も一緒に伸びてくるので毎日草取り作業が続く。長い畝を跨いで一人ずつ受持ち、数十人も並んで長い柄のついた鎌（チャーブカ）で雑草を取りながら前進、畑の中で昼食の黒パンを食べて更に進む。夕方になっても畝の端には届かない。翌日もまた次の日も同じ作業が続く。

草取りも終わって間もなく収穫の時期まで小川の近くにテントを張って、夏の暑い日は小川で水浴をしたり土手に生えている楊柳の枝を切り収穫の時に使うかご編みをしたり、入ソして初めてで最後のノンビリした生活だった。

八月の下旬にジャガイモの収穫も終わり九月中旬再

びナホトカへ戻った。

昭和二十四年九月三十日、日の丸をつけた引揚船第一大拓丸に乗船、異国の丘に眠る戦友に別れを告げてナホトカ出港、十月三日、六年ぶりで懐しき故国舞鶴港の土を踏むことができた。

後遺症

復員した昭和二十四年末頃は外地に在任していた数百万人の帰国もほぼ終わり、戦後の復興もようやく軌道に乗りつつあり、ソ連引揚者と言うと「赤」と決めつけられ就職も思うに任せず色々と苦勞の連続であった。

小さな町工場の事務員の職を得て、貧しいながらも人間らしい生活ができるようになり、朝鮮戦争を契機に日本の経済復興は急ピッチで進み、復員して三年後には三十歳を真近にしてようやく家庭を持つことができました。

平和な暮らしに戻ったはずが、帰国後十年くらい

時々見る夢はシベリアの収容所の明け暮れ、「ああ早く故郷に帰りたいナァ……」ふと夢がさめて、ああよかったです、今は故郷にいるのだと胸をなで下ろしたことも度々でした。

20世紀激動の前半に生まれ平和な後半を経て間もなく21世紀を迎えようとしている今日、今年を重ねて高齢者と呼ばれる年齢となり、戦争の影を背負って生き延びてきた後半世紀は、ソ連との激戦で散華した戦友と、シベリアで帰国の夢果たせず悲憤の死を遂げた戦友の慰霊と供養に心掛けてまいりました。

二十五年前頃より初年兵教育隊だった三浦部隊の戦友会事務局を担当させて頂き、毎年生き残っている戦友を集めて慰霊と供養の会を続けております。また、昭和六十三年には、機会を得て、ソ連軍と激戦を交えた多くの戦友を失った中国黒竜江省の富錦と五頂山まで訪れ、翌平成元年にはハバロフスク、イルクーツクまで足を延ばして異国の丘に眠る戦友の墓に参拝し慰霊してまいりました。平成七年には再び中国黒竜江省ハルビンからソ連軍に武装解除を受けた方正を訪れ日本

人公墓に線香を手向けました。

富錦で戦った第七七五部隊生き残りの部隊長、中隊長、戦友等の長年にわたる執念と努力で霊場高野山奥の院参道に部隊の慰霊碑が建立され、毎年八月八日に戦友会、翌九日、ソ連軍侵攻交戦を始めた日に慰霊祭が行われ、全国より参集して戦死者、先亡物故者の冥福を祈っております。

あと何年生き延びられるかわかりませんが、自由の有難さ、平和の大切さを一番よく知っているのは、身をもって戦争を体験した生証人の私等です。

後の世の人々には二度とあやまちを繰返させないためにも平和を守る事の大切さを語り継ぎ、尊い犠牲となられた英霊のご冥福を祈りながら過ごしたいと思っております。